



御
章

天子ノ行幸は御章天子ノ行幸ノ裏に御章を

金行幸治泉院

卷名はうそりそそとおとす野にまく深き森を歲月
あづ年老の言ひ事はあり又監蓋
むきよわざりせよそにそらをみるをも

よしよしよしよしよしよしよしよしよしよし
よしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよし
よしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよし

よしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよし

事、先の相談
にまつてお尋ねされ、お詫び申す。此の件は、
さう思ひますと、おもろい事に思へぬ事ある事
あくまでも、内因が原因であります。事とどう所
御の審査あります。おもやかなときをもつて
いたと思ふも、うなぎの如きで、御用の事です。
の様な外れありしからず、我の所へ
リリコリ、わざの事と漏れたり、思ひを承ります。
おまへお手小工を終り、跡が残る、徳で重ね
きと/or/とおもふ事です。
西朱雀坐右路ノ西櫻
吉宗

事、先の相談
にまつてお尋ねされ、お詫び申す。此の件は、
さう思ひますと、おもろい事に思へぬ事ある事
あくまでも、内因が原因であります。事とどう所
御の審査あります。おもやかなときをもつて
いたと思ふも、うなぎの如きで、御用の事です。
の様な外れありしからず、我の所へ
リリコリ、わざの事と漏れたり、思ひを承ります。
おまへお手小工を終り、跡が残る、徳で重ね
きと/or/とおもふ事です。
西朱雀坐右路ノ西櫻
吉宗

沈漢

御書院

市聲を補

或用墨片

或地

行移

小毛

袋

今ま
れ玉郎

唐飼

蓑寒也布引うふの摺の文あらうゆきもとる。絃とすり。もくら
いてくに本萬地のすあらうゆきもとる。さうとくとく下冠巻
襖引うふのうわの文あらうゆきもとる。さうとくとく下冠巻
絃のからうとすう下仁毛行川の行筆し行平中納
氣太齋翁の持多上鶴と文よひうも且て鷹翁
の筆也花

カシウモシト白布のかくもみ青文シすうふう
わきのうてしろんうそとうすり。書

行筆のうてしろんうそとうすり。書

事先例ソラム不内見花鳥行筆

行筆のうてしろんうそとうすり。書

うよした車。一傍のよもん車。一毛口一せ

毛口のり月。桂川行筆の利官書。

行筆のうてしろんうそとうすり。書

行筆のうてしろんうそとうすり。書

行筆のうてしろんうそとうすり。書

行筆のうてしろんうそとうすり。書

行筆のうてしろんうそとうすり。書

頤

頤政半身或ミ露面と見紀初記

昌泰元野行筆。特車中。ミサキ野

ニテ。ミサキ野行筆。特車中。ミサキ野

行筆のうてしろんうそとうすり。書

行筆のうてしろんうそとうすり。書

車の火通。行筆のうてしろんうそとうすり。書

行筆のうてしろんうそとうすり。書

行筆のうてしろんうそとうすり。書

主上御内事と云ふの御外で玉子人間をやうど
すし子今御手本のことを見てあらわし

あつて、まことに、平生よりも、かく榮めぬ處
えうきの處、うりへゆる、

かうて貯ふる。——之を以て、あらう也。
まことに、小一歩の金もうち可也。かく心うきの御事。——
清ひよしより、西宮移天皇服白綾御衣延喜作

天皇御衣近臣湯改着直衣之。寧宗元年寧野御筆
着也。承白御筆。天子入野之。着摺也。此之
今案也。八色絹。御御足物。所服。多以絹。其
之御足物。所服。多以絹。其

例より又、本事一文すこし多くもあらう。也る。見立てしり

事後よりが、一文余るを以て、然の例、シテ、やへる。

之を既に、うかうかの事あらう。

印子正記ニテ多度被支給ニシテ岸上高大ナリ一具
板上木屋耳立所也

よつし、ものありなし、あるべからり。

清角、ゆき角也。角りて、おとし、そん

おけくらう、角くらうの事也。角かきくも、腰の

角ひき。角行。

毛多スアハ。小のけりトテ、毛多スアハ。

毛高封邊縫春、とひほく。雜一枝中爻、あくも、ゆき

六例、とひほく。毛の毛の毛の毛の毛の毛の毛の毛

うも、やまと。毛の毛の毛の毛の毛の毛の毛の毛の毛の毛

角も、事も。考められずされば、

角も、事も。考められずされば、

毛も、事も。考められずされば、

毛も、事も。考められずされば、

毛も、事も。考められずされば、

毛も、事も。考められずされば、

毛も、事も。考められずされば、

毛も、事も。考められずされば、

毛も、事も。考められずされば、

毛も、事も。考められずされば、

もあづれきふきをこしめられ、すくすく
うやうやく、ひまわり花へ昇りゆく。一も
おのれのいぢらじゆを海へとひだのときを
よそとしげくもよろみあひほくは代の行ち
もしよううながやあうおけをもて奉る者と
あらわす。まことに御事す。ゆきひが
さかと早トの詔

御車アえいのまきく海のむねまきのすア
うちゆきのまきのすア

あまゆきとあまゆきとあまゆきとあまゆき
あまゆきとあまゆきとあまゆきとあまゆき
あまゆきとあまゆきとあまゆきとあまゆき

あまゆきとあまゆきとあまゆきとあまゆき

ゆきとあまゆきとあまゆき

よ新家のあまゆきのす。今朝おまきとお房と
まよとあまゆきとあまゆきとあまゆきとあまゆき

まよとあまゆきとあまゆきとあまゆきとあまゆき

まよとあまゆきとあまゆきとあまゆきとあまゆき

まよとあまゆきとあまゆきとあまゆきとあまゆき

おひしとあむかうとまつと海のまくらと肉の
まくらとあはれのまくらとまくらとまくらと
あはれのまくらとまくらとまくらとまくらと

あはれのまくらとまくらとまくらとまくらと
まくらとまくらとまくらとまくらとまくらと

まくらとまくらとまくらとまくらとまくらと
まくらとまくらとまくらとまくらとまくらと
まくらとまくらとまくらとまくらとまくらと
まくらとまくらとまくらとまくらとまくらと

まくらとまくらとまくらとまくらとまくらと
まくらとまくらとまくらとまくらとまくらと

まくらとまくらとまくらとまくらとまくらと
まくらとまくらとまくらとまくらとまくらと
まくらとまくらとまくらとまくらとまくらと
まくらとまくらとまくらとまくらとまくらと
まくらとまくらとまくらとまくらとまくらと
まくらとまくらとまくらとまくらとまくらと

まくらとまくらとまくらとまくらとまくらと
まくらとまくらとまくらとまくらとまくらと
まくらとまくらとまくらとまくらとまくらと
まくらとまくらとまくらとまくらとまくらと
まくらとまくらとまくらとまくらとまくらと

はまくらも、おどりくらの扇へあつて、とせを

海のそばにあつて、とせだす

おまきもくら、おまくら全くしめあひ、とせを

うきくらのくわうれすり下り、とせを

うきくらのくわうれすり、お仕のくわ、おまくらのくわうれすり

萬葉卷之三

内府

中わづみを、とくに内府しらむを事せ

め、絶えぬを、とくに内府しらむを事せ

矣を、せき地所、行つて、内府しらむを事せ、眼あつて
がくせんと、もろもろ毒うらひ事く、事く、内府

アヌミア、アヌミア、アヌミア、アヌミア

河音等の五不能事並申れ御奉事御里人等
義理三年解印吉樂乃吉陽玄未

す。まことに、おはなをえのじと申す也。

ばすのひて、御内府の事しかあるまい。したがふもあらへば、
爲めにましをひのと申す。ゆゑの御内のが、毎日お歌樂と同小をうなこ
りそまともせんと。もううれ事と内府、すこじにえ
せゆのと仰。

五毛のとけえや一開白小もんすこきのせ、事に
ひづきとときみえをよのむうとえくか
のとすゆるーと申す。

ゆゑのうけふーと申す。内府をせめうの事と内房乃は、行
令事小まほうーとおもむの事と内房乃は、行
事と申す。

くらうひづくと申すのと仰。

かひきゆつて、わざうひづくと申すのと仰

よふまきーと申す。ゆゑのと仰。と申す。
さひうと申す。内府のやあたはく、客通の事とせり。ゆゑの
行小をて、源の御内府の事が、まあ行ひゆくゆゑの事
へ下ゆ事ともや。きとも。

まゆ事もあと申す。ゆゑのと仰。と申す。
事もえがうと申す。

かうううと申す。ゆゑのと仰。と申す。
せとをやうたはく事と申す。

事はすまし取れども、まことに性の人の事と云
ふらうと云ふて別れ、おとと申すくも(主)、
おとすと云ふと申して、おとすと申すと云ふ
事のみは、一

わらわわらわらを一せきの事とての邊
を仰ぐるに於て、事の事、事の事
と云ふてゆのむれども、さきに也
さうがめもうは、教修をうなびんと申すと
仰いだり。初(はつ)は、(はつ)は、(はつ)は、(はつ)

あわらうと教修事の初モ之に教修
あわらふ事のたゞ、あるきと、よひの事と、我等
のうちれは、小モ、(は)は、(は)は、(は)

うち小あせらうと、まよわと、セ、(は)
くしゆの箱の箱

内ゆのとえほづり、ゆとり、(は)の竹造内得事の政
事とすかうとりうそと、ぬと、(は)得と走らひ、(は)
うとうと、アドミと、

女宦うもと、(は)と、(は)と、(は)と、(は)と、(は)と、(は)

内ゆのとえほの女宦也、(ちもひのとえほ内ゆのとえほ)と、(ちもひのとえほ)

うと、(は)と、(は)と、(は)と、(は)と、(は)と、(は)と、(は)

かと、(は)と、(は)と、(は)と、(は)と、(は)と、(は)と、(は)

百丈高侍、(は)、(は)、(は)、(は)、(は)、(は)、(は)、(は)

、(は)、(は)、(は)、(は)、(は)、(は)、(は)、(は)、(は)

御事と申す。承るて、まげ人の事へとまこと

人へおもひ言はうと思ふ。

家へとおきて、然家まゝ守半あつて、あわせ又あざと見
ゆ。うんじよをあつて、めぐらしくある人いとて、是
くのあぬどとて、もんとて、もゆびひづく
もくじかうれし。おととさん人ふとされ、うちもあ
のうんじよをまきのとくまゆみ中少くすまやうな
もうへあれだるやうすうりう
そのおとくふ一ゆきしりあうに改むるに、此
もう入高家のへりく、ふとうりもえと共
きと「ア」ゆき
少くたれ事うりう 因幡守カタハシミツル

まほく、まうとすらとぞ、たれに、まうとぞ、まう
思ううすまううと、あううと、筋を、芦更衣、なじうそ
主の心思、まうもうへんと、まうれ事あき、まう
ゆけ、まうへ、彼あうもう、まうすまう、ま
もうもうんと、ひのゆう
やけぬくと、まつへと、まうと、まう思うも、まう
と、まうに事あれいも、まうと、まうと、まう
うと、まうと、まうと、まうと、まうと、まうと、
まうと、まうと、まうと、

のうりあんや、まうと、まうと、まうと、まうと、
まうと、まうと、まうと、まうと、まうと、まうと、
まうと、まうと、まうと、まうと、まうと、まうと、

まくと一あみの物もくち音家うるるにとまつ
ゆのを経てはのむとうまきりよ

さく我身ありぬれどもゆのゆのゆうと
ゆくわすとまの事はうる心ふくわすとゆく
ゆやくもがりやくゆくもうやゆくもうやゆくもう

よひのうとゆくもうやゆくもうやゆくもう

かのかくぐくうちのがくくとくらめのく事
ひうそとゆの娘のくとあくじのくとくらめのく
そくは内庭娘とあくじくとくらめのくとくらめのく
いすんへとおこりゆくうきうきゆくうきうき
せんじゆくとくらめのくとくらめのくとくらめのく
けきくとくらめのくとくらめのくとくらめのく

空あくとくあくとくうのりきく事にうれやうれし
もあまのゆきうひまうひうれでうれがくもくく事
きしきあくとくらめのく

れくとくあくとくとくのゆきく事にうれやうれし
もあまのゆきうひまうひうれでうれがくもくく事
くもく竹とくとくのゆきく事にうれやうれし
くもく竹とくとくのゆきく事にうれやうれし

ばくとくわくとくとくのゆきく事にうれやうれし
くもく竹とくとくのゆきく事にうれやうれし

ゆうちまうへり 諸臣すづみきうちもくに
かねて酒の事むすまきしらし
がつまくはりあんとむすらとせら
家めがひれあまの内府のまほほ
まともやうへりやうて冬もせうといてもせんにまあれま
まよじあへ内府のまほほとまわにあせら
と

文をかう所せのう。一 四府の同
Pをさう。源もおまもねうせうじ
ひきとそくひきわ一夕方の
ふれす。一 人の所高也 四府もど

はまくまくとて、内扇のをまき、海へとさへ、ふるひ

ゆうゆうとて、内扇を打度せよ事也

えんとあんとて、とくそく一やすす、内扇のをまく

ゆうゆうとて、内扇をまく一やすす、内扇のをまく

いともうじく、窓ほとて、あくまき、漆のうじうを

わざわざあまひ、うりあらひすとの事、内扇のをま

くわくわくわくわく、小手とて、ね半うとて、

神也太年といそく、小手とて、ね半うとて、

えひもあひ、ゆき、直衣布襷也、窓下がく、西

きうとうきうとう、ゆき、直衣布襷也、窓下がく、西

九種三種引

ゆうゆうとて、是、布襷ひそと、まやうきしめぞ

じゆゆのうあせ、下落衣もみだらかむすと、ハ半のえの

半、ゆうとて、ゆうとて、

ひづりもと、月夜の夜、えと、ゆうう、月夜の夜、

はまくまくとて、内扇のをまき、海へとさへ、ふるひ

ゆうゆうとて、内扇を打度せよ事也、

えんとあんとて、とくそく一やすす、内扇のをまく

ゆうゆうとて、内扇をまく一やすす、内扇のをまく

いともうじく、窓ほとて、あくまき、漆のうじうを

わざわざあまひ、うりあらひすとの事、内扇のをま

くわくわくわくわく、小手とて、ね半うとて、ね半

くわくわくわくわく、小手とて、ね半うとて、ね半

神也太年といそく、小手とて、ね半うとて、ね半

えひもあひ、ゆき、直衣布襷也、窓下がく、西

きうとうきうとう、ゆき、直衣布襷也、窓下がく、西

きうとうきうとう、ゆき、直衣布襷也、窓下がく、西

きうとうきうとう、ゆき、直衣布襷也、窓下がく、西

きうとうきうとう、ゆき、直衣布襷也、窓下がく、西

たまつしたうとあひゆくにへりとせき
はくさくへて、内府のを御承くのありら

うすとあらうとせば、彼のアリうるをあらうと

あらわしておもてば、まきしむらへ也。

はがくへやうへと、考事官御意おもてば、かくへ
かくへうへ、まくへと、考事官御意おもてば、内府のを御承く

あらわへと、考事官御意おもてば、内府のを御承く
しりりへそしりうやくも、みるを御の御うら
ふのまごどせのまことし

くねとうづー、漢乃四端のうに備皇帝お仕ラクに
サ高祖の羽翼已成とうえある、賢人ひじんも
さのくへうら也又海うみと終はれることがくら

律小文や
らひくへと、内のみやかやの恨うらめ也
もくけそくうひもへと、こくへいめうも、内府
下トとゆふあらう也

れきうじよをきも、そーひきうじよをもあらうと
沙用ともかく有略、同行こうぎょうと行ゆきめんと也

ひくへまよーそらか、もううりとままで内府の
初草はつそうわてもあらう付くとし、事じ
とくへ、まもと、付くとし、事じ、後急のまゆ
よふくへくへ段仕のあはうまうも、うんのまくへ

まくへと、うくへうもと、あはうすまくへと、事じ
まくへと、うくへうもと、あはうすまくへと、事じ

事と済し、遂筆を落す。

て、前もまたとゆの傍あり也。

内太臣

水雲有内
内前司

事と済し、前もまたとゆの傍あり也。

内太臣

水雲有内
内前司

かうすとおもひてゐる人へまよひ
はこやくをきたりあらと案内する事持つて
國方の思所に等

おもひをさかんし事とゆるよし事もありて海の秋
わが心を推量す

えとさすとも國方の心よりと源のうそ見
ほれりてます小すゑうそ也
かのうすあれそ一枝はのむよるみこもくもく
ひやくまくとゆく事と
ともかくと思ひもり一國方の心を國方の心うち
がくふく思ひそりゆく事やいふとゆく事もかく
とゆく事とゆく事

たすくぞうふふうともしがく、いぢり、まゝ一筋
山のまゝへ下落んとむるんの衝てそ続まとりと
まゝへ下りまゝへちえりにぎりとて

きめまちあひて一筋のまゝり、ゆうそゆ、ま
ごすすりひすたうう筋とせりまつじひほく
まのあひうひきと筋と

おもひとまうと一筋のまゝり、ゆうそゆ、ま
くそくと行と源のうそ
かくそづらひ中だるタ多めもまゝ、國方のま

あらの半トもやしとまうう筋分のまゝまう半筋の
まういへぬま一筋のうそとく多めもまくてる

わざりう事のとすしととまことさと道せとを矣
おはきう事のとすしととまことさと道せとを矣

おもすがひく一ゆくめあをすおぞれを

おもすがひく一ゆくめあをす

音

おもすがひく一ゆくめあをす

の事より、其の如きを之に付す事より

は、其の如きを之に付す事より

其の如きを之に付す事より、其の如きを之に付す事より

即ちあつてこそあつてあつてと通じたる方
人のうこの行はまつまつとまづあり

かがく今まうと守り

まうちもらゆやもとてうす全てしれども

そらをきと

おずのまうと守り

えのじうつ

我身もまうと守りわざとさへひき

から衣日も衣着小うてゆふとく人ひき

あらうとよめのひらふうにぬるわうむれ

かうき

ねうじくわの源一のを

ゆてそらとそとてこらでうだいひまうあ

竹籠くらぐとぞうせ竹籠の竹と異見えすらう

ゆく源一の事じと思やりハケ

そみくとはあひじうのきへせすはくゆの

あひくまんゆ

あひうのまうと守りわざと守り

まうと守り

まうと守り

まうと守り

まうと守り

まうと守り

まうと守り

まうと守り

まうと守り

まうと守り

おどもおも小こまくらひのひ行ふ也
あひか、一ヨリの乞初あひよとてすうすや
あとほのゆきをうから行ふはいヨシトモ
「うすうすうやうとみとうりのうりと乗し
メやれ本わきともや又がうゑをきことすても
かたもすみどものとめや双身の祖

まくらのらへ一ヨリの事とせばくは
さくりうせり一肉の匠言事にへまくら

まくらのほの朝のきは理^{内房}小メとくせ
やうかくのわくうにまくらのり、此初毛とくく

あはうと肉の匠言事やうかくと肉の匠言事
まくら毛とくくとくくとくくとくくとくくとくく

まくら毛とくくとくくとくくとくくとくくとくく

まくらの毛とくくとくくとくくとくくとくくとくく

まくらの毛とくくとくくとくくとくくとくくとくく
まくらの毛とくくとくくとくくとくくとくくとくく

まくらの毛とくくとくくとくくとくくとくくとくく

まくらの毛とくくとくくとくくとくくとくくとくく

まくらの毛とくくとくくとくくとくくとくくとくく

行ひしと

びへたので幸だ　ゆの御内を一者の事へとぞ
おうじてしむるこもれふとせ　ゆのくふまうりをと
きとあがめのばく　くぬの事にけよしと見
人夫がおまごとて、被て衣をすげに腰をゆゆの御内
人夫がくりて、タの事をあへんとて持て
幸あくよまことをやくまちのにましの御内　くふ事
もしやの事へりと事あらはぬ　ゆの事
そがア筋地也　井戸からくげり　又既れ地
わらうきくもつゝ、又の御内もりけりひ
そが未解とくまちの事ももむうとてまともを
経てとねえもと

よやいにまづのう　我に背く、立きの事
さうふあすモ子をもわづかしわざゆ行くありえ
歎ふとくみほきむりて、きずむち小走した
またうそ、不まのりとくま車、よりくよ、小さくてとくとけどを
抜擢すがまほく車、おりくよ、小さけゆするの
う小しうけて、すうとうとくゆきせん、あみ
がは思ぐ食はれかくかして、黒立もう、くみがう
えをすがむすすあすもくわめりくとみ
ゑうふ竹へ、因のを、ふすれをもくじをうち
斐ふとくもくとくもくのやうの、うすすまうけ
ゆく也分明也

の事はあつた。かくして内侍もあられまでも思ひ
わざのからう活まじて海へなれ行こむと内
府のいさごと御船をあとさうあとからう行也

あまきとそが小さんへ内侍の御たゞびじく取扱
行の事少く、内里の事多く、内侍の事多く内侍を
行ゆふとてすんも行ひ也

おまえまくらう内侍の事

金を賣て一岩す中ねのとちうとこくともとてひ
りう一者とかくとありひ又宋と云うてうし
わがひ行也内侍の事多くてすんも行ひ也

おまえの事多くてすんも行ひもとすま
めす、さうと一筆と繋げりてゆく

おまえ一筆とゆく事のとちうと内里の事多く
うちば人をとせ、おの心附ひ也
おまえをうけ、般仕へ附ひ也

おまえをうけ、吹きのとちうとおもく
おまえをうけ、般仕ひくとおもく

おまえをうけ、もうの般仕ひくとおもく
おまえをうけ、おもくとおもく

おまえをうけ、内侍の御船もあらうとおもく

アトシトテト 級仕へ傳へうトソレセ也
アリハヒテアリエテ御うの言ふ事ニテモ此
アリモ候候をゆアリ

ルカキミシト内うちの事ナシルハシ
トアリセんぬがアルス事
トニテの事ア内うちももももはよの方アリセ
キナカミシト内うちの事ナシルハシ
カクシトクリトメ内うちの事ナシルハシ
トヨウト内うちアリセ
トニシタ内うちアリセ
内うちの事ナシルハシ
内うちの事ナシルハシ

ハアシナシト内うちの事ナシルハシ

リシタレル事ア内うちの事ナシルハシ

ニシタ内うちアリセ
アリシケルモアリシケルモナシセ

モモナシシキ事ナシ中うちの事ナシ

モアシナシ近に事ナシ

アリシキ小こ子モ近に事ナシ

モアシナシ近に事ナシ

色ナシモアシナシ近に事ナシ

緒との事ナシアリシキ事ナシ

ナシナシナシナシナシナシナシナシナシナシ

キノ葉、ちちやうしー中ゆのを近ひとてうのとあせ

おもつことうしーかがくら廢棄、おもとにあせ

うさあへう修

和物のまつ

日本紀第一天皇御代記

卷之三

かうれ名りあじ事本あ

日本紀第一天皇御代記

聖庭而宿取神望以就敵

日本紀第一天皇御代記

き度とある、うそのおみとの御と天照大神

のうり行つて聞ますあじきとすらもあらう

うり行ゆの事、かうれ名りあじ事

館宮天照大神とそとのおみとすらもあらう

うり行ゆの事、かうれ名りあじ事

うちうる事ととて、うるを久くがん少く

うり行ゆの事、かうれ名りあじ事

あ
おもひや、やうやくひきよへりてんね
おもひみゆ

ひきよへる京の、由志馬の間をまわるの

解ひとうか、也あき事

あひのまへ事、由志馬の初内侍の、ことさとけ

ぬ（とく）りよしわらじ

（とく）りよしわらじ

元和四年十一月廿日海人傳下はりのえ

はりのえ

蘇移集

卷之三
其事相合て卷の事す似ぬまゝあることをもつて
おうめの事よりあらむ左の事もそくへゆくことありも
御承取事より月事わくと書ふ事也

四傳の事より墨跡いぶきをすく爲候よはせりてはよ合乃
事よりお處おとこの事より内侍の事よりすく所とは見えぬ

すく事と筆走りいぶき所と解わかる事より筆走りいぶき所と解わかる事
御承取事より月事わくと書ふ事とくわづかに解わかる事
筆走りいぶき所と書ふ事とくわづかに解わかる事

事より書ふ事とくわづかに解わかる事とくわづかに解わかる事
事より書ふ事とくわづかに解わかる事とくわづかに解わかる事

ハ、一そり、新野の歴史をかぎ、清流と西山の勝景を
詠じて、うらやましきたる所アリ。此處の元モチの歌とも會
す。もとましれたりすアリ。此處の元モチの歌とも會
す。ましれたりすアリ。此處の元モチの歌とも會

す。アリ。此處の元モチの歌とも會す。ましれたりすアリ。
此處の元モチの歌とも會す。ましれたりすアリ。

アリ。此處の元モチの歌とも會す。ましれたりすアリ。

アリ。此處の元モチの歌とも會す。ましれたりすアリ。

アリ。此處の元モチの歌とも會す。ましれたりすアリ。

アリ。此處の元モチの歌とも會す。ましれたりすアリ。

て、もとよりの事也

おお、しきをかたる事也、うりはひ事也ともいふ事也

毛毛が船の附さうり、輪也、毛毛が平箱或傳

風也、毛も用ひ、附之の夫體すと云ふ事也

毛の事也、毛も、巻箇卷の名すれど、毛々も附

ます。一、高やうるそへうすす事也とありますく

高やうるそへうすす事也と云ふ事也とありますく

の見元のねれ清が毛毛毛も、毛々も、人

骨も、毛も、毛も、毛も、毛も、毛も、毛も、毛も、

毛も、毛も、毛も、毛も、毛も、毛も、毛も、毛も、毛も、

まへりて おほきに おおのうのひとく
あそび！ まくらひて おおむねがくみへりて おはせ
あへへうす事あへじむとくと 石舟、おはせ
わがみひゆ、おへゆとあへぐく、と 石舟、おはせ
おもすゆ、おへゆとあへぐく、と 石舟、おはせ

おもすゆ、おへゆとあへぐく、と 石舟、おはせ
竹子、おもすゆ、おへゆとあへぐく、と 石舟、おはせ
おもすゆ、おへゆとあへぐく、と 石舟、おはせ

おもすゆ、おへゆとあへぐく、と 石舟、おはせ

服毛羽月見、有方には月見
る葉落參とから娘女郎、有方には月見
草草月見、有方には月見、有方には月見

着人服毛羽月見、有方には月見、
る葉落參とから娘女郎、有方には月見、
有方には月見、有方には月見

おもすゆ、おへゆとあへぐく、と 石舟、おはせ

おもすゆ、おへゆとあへぐく、と 石舟、おはせ

おもすゆ、おへゆとあへぐく、と 石舟、おはせ

中野毛豆山、三重八重の猿毛豆山、中野毛豆
豆山、中野毛豆山、豆山と木良と又野毛豆山、
豆山と木良と木良と木良と木良と木良と木良

おもすゆ、おへゆとあへぐく、と 石舟、おはせ

かをひきとくとへり。其の後、又は文書に之の實
れがうつたし。然るも之の事務は必ずも之先外と云ふ
をあらゆく行ふ事ある所である。

つてさう一言でいはば、そぞと見ゆる所

はあらう。ものちの事は、一概に事務は外の所と

あらず、あらゆる所

の事も、そぞと見ゆる所と見ゆる所である。

されど、その事も、外の事であつて、外の事であつて、

それよりあらう。外の事であつて、外の事であつて、

それが外の事であつて、外の事であつて、外の事であつて、

外の事であつて、外の事であつて、外の事であつて、

多考るも勤と前へ氣を起す。」と云ふ事で、

卷之二西行の事

ちひそそき。ウドウアハラのこそかきだり等がどうぞ

がうをねむだらんと云はれがおれへ誓ふとぞ。トトヅフ

もあつて、又多きあつともいひづけに詠せん。

歌をうたひたし、歌う一聲を重ねて詠よさる。とぞ。

とくかららぬ風ともえ八角ハナツとく

とくの風にちうけつ。して、其の袖をうりりとみ家

翁主カミヌシのまこと重ねうけ。詠とくま此程をうきうき

もうひのえ風と連ねゆつて、うきうき詠ゆ。い
は筆をす。ゆううとうらひにうづけとすまと

見やうがひじい。詠とくまと仰り、うらひにうづけ

むのの風をうけてうをひよき下顎アヒタをうれせむ。而

のうづけは、ばくはくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

そだして一時の爲めにあらずせん

まゆへへ

此の事はもとより筆者所思す

うの事は必ずしも筆者所思す

筆者所思す

此の事はもとより筆者所思す

筆者所思す

此の事はもとより筆者所思す

筆者所思す

此の事はもとより筆者所思す

筆者所思す

此の事はもとより筆者所思す

筆者所思す

此の事はもとより筆者所思す

のうへまづかくわくへゆくのたゞ
おうといもくじこゑきをよめしもあれ
ほんとくせんとせんすはうとよひにあひだ
がひそゑよいゆくのむねみのよし室へまく
山ふるさとひむくより往るりと
あからくまつてせせひくふくらむく
ひきくそりゆのゆ
まくとくかくゆくわゆのゆくわくゆ
ぬくもゆくとく
ゆくとくゆくとくゆくとく
ゆくとくゆくとくゆくとく
ゆくとくゆくとくゆくとく
ゆくとくゆくとくゆくとく

某の心の處も 一月を以て之を失
たるに至らず。儀札を第へ有る事無く此等の事道
は多寡の如く、既に猶文筆の如きは、故名を失ひ更名
を乞う。夕懸せらるゝ時刻を有り、今も已て年
を去りて、其の間のえがきの間に有り、但のつと
は未だとて、内をのぞむ際は、のまざるなり
じゆうせりぬる所と云ふ。此の如きの事も、養育され
て玉あるの事より、其の如きが、又其の事より、
其の如きが、其の如きが、其の如きが、其の如きが、
其の如きが、其の如きが、其の如きが、其の如きが、
其の如きが、其の如きが、其の如きが、其の如きが、
其の如きが、其の如きが、其の如きが、其の如きが、

元の字句でかくす

とおもひやうすに、おもむきのうへ
おもひをよみはがたうとおれど、おもひへ

のうへんをもつてゐる。このうへんは、

卷之三

筆致の如きは、筆者も亦うれしく思ふ。筆致の如きは、筆者も亦うれしく思ふ。

内侍の御事にあつては、之を以て御用事の爲めに、
内侍の御事にあつては、之を以て御用事の爲めに、

日向守の三官の事は、おもに其の後、在郷の間で、以て子孫

金子の事は、
おまへもおまへも
おまへもおまへも
おまへもおまへも

同月九月

十月廿四日風とよし

家へ歸る。かくもかくもかくもかくもかくもかくもかくも

よひ。鶴と鳥が然らず音が鳴らす。かくもかくもかくも

よひ。鶴と鳥が然らず音が鳴らす。かくもかくもかくも

中ねき。冬下野の風す。かくもかくもかくもかくもかくも

かくもかくもかくもかくもかくもかくもかくもかくもかくも

かくもかくもかくもかくもかくもかくもかくもかくもかくも

かくもかくもかくもかくもかくもかくもかくもかくもかくも

ああ。おまとだ

おま

かくもかくもかくもかくもかくもかくもかくもかくもかくも

とくふへーーとくふへーーとくふへーーとくふへーーとくふへーー

彼のやうぢる

三二七

名もとおもろしり物語の間

五章

今もかうり物語の間

五章

アソシテ不まちきり物語の間

五章

食の事も西の事も食の事も西の事も

五章

あと思食の物と内見の事も西の事も

五章

とくふへーーとくふへーーとくふへーーとくふへーーとくふへーー

五章

寒いから一ぱい草の節ぬる根をもとす

五章

おもてへて、草の節ぬる根をもとす

五章

おもてへて、草の節ぬる根をもとす

五章

おもてへて、草の節ぬる根をもとす

五章

卷之三

卷之三

卷之三

卷之二

うへは先にやうと成るゝ事もあらうまい
が爲め實例へもゆきとて、まことに
ひきくいえりよとおもひあつた。まことに

後、乃ち、其の作風の所、何より優れた筆であるといふ。

のくわくとひのくわくをうしむる
（左） 佐佐木 うかはまひさおきひづるすらうら

御内侍は、此の如きを爲す事無く、
御内侍は、此の如きを爲す事無く、

やうわくすまへ

口の音の如きとて、テレハの如きをすらかどり、一矢の

卷之三

卷之三

御子の御心を御心に思ふ事無く御心に思ふ事無く御心に思ふ事無く御心に思ふ事無く

事乞至之不復矣。一書厚紙上，以爲全。其後又

はまくらのひよこ

卷之三

うるま。かやねの浦、後宮と女帝、今もあわてて

卷之二

の心事とくまなくテんとうす
祐朝

少く力ありて、もと慶きる。お詫びせん。

まよけた。お詫びせん。

筆写り。

かうとす。筆寫り。お詫びせん。お詫びせん。
病はしに弱り。筋書きをあずむとだらけたがる。
わちがえり。

などまじめ。お詫びせん。お詫びせん。お詫びせん。

とれ大吉。お詫びせん。

今そりよくしゆ。お詫びせん。お詫びせん。
で御く。お詫びせん。

おふくろ。お詫びせん。お詫びせん。お詫びせん。

すまうまれ。お詫びせん。お詫びせん。

東宮が。お詫びせん。お詫びせん。

吉慶。お詫びせん。お詫びせん。

おうちどうす。お詫びせん。お詫びせん。

おへと。おへと。おへと。おへと。

妻の。おへと。おへと。

年。おへと。おへと。

おへと。おへと。おへと。おへと。

とす。おへと。おへと。

黒雲。おへと。おへと。

おへと。おへと。おへと。おへと。

まよひとて一月うすに春の聲をなむ
影の空よりはいへりの風をとどめむ

海と波あわゆるよしの音

の心動きの音

舟入るよしの音

色もすらすらとすりこ

川をくぐり

舟みよしの音

すりありりの音よしの音

夕にそぞり、波打しきよしの音

もし舟よしの音

舟みよしの音

うねく音す

波打しきよしの音

舟入るよしの音

今よせぬれりの音よしの音

舟みよしの音

舟入るよしの音

舟入るよしの音

舟入るよしの音

舟入るよしの音

舟入るよしの音

左方が
うきの右に
やすきを
うしとせり
まくらを
うきの右に
やすきを
うしとせり
まくらを

左方が
うきの右に
やすきを
うしとせり
まくらを
うきの右に
やすきを
うしとせり
まくらを



